

BUSINESS

ビジネストーク

TALK

「イノベーション」

頭取 高橋 祥二郎



「破壊」という言葉に少々懐疑的な印象を持たれる方も多いかもしれませんが、既存概念や固定観念に捉われ、あるいは過去の成功体験から脱却ができなければ新しい発想は生まれません。現状を「破壊」し「ゼロ」からの発想をしなければ、ブラッシュアップや改善にとどまり、革新的な技術や製品は生まれません。すなわち、物事の本質を見極め、新しい発想で失敗を恐れず、行動を起こし続けることがイノベーションの原点と、激励されたものと受け止めました。

明けましておめでとうございます。新年を迎え「今年こそは」と決意を新たにされていることと存じます。読者の皆さまにとりましても輝かしい年となりますことを、心からご祈念申し上げます。

さて、私事で恐縮ですが、先日、大学時代の恩師を囲み、ゼミの先輩や同窓諸氏と懇親を図る場がございました。予期せぬことでありましたが、当時恩師の講義でご教示いただいたシユンペーターの「イノベーション」について、改めて振り返り、考え、議論する機会となりました。

日本語では、「技術革新」「新機軸」と表現さ

れていることもあり、最近では専ら新たなビジネスを創造することがイノベーションであると認識されがちであります。特に、五つの類型(①新製品・新サービスの開発②新生産方法導入③新販路開拓④新原料・半製品の供給源の獲得⑤新組織の実現)は、今も実業家にとって絶えず意識する言葉でもあります。

しかし、米寿を迎えられた恩師は、「シユンペーターは、イノベーションの本質を『創造的破壊=Creative Destruction』と定義している」とおっしゃいました。当時を懐かしく思い起こすと同時に、心にグツと迫るものがありました。

急速に進む少子高齢化・人口減少・財政赤字の日本にあつて、企業経営は今までの規模・量の拡大(成長)を追い求めるのではなく、質的变化(発展)を生み出すイノベーションのみがこの閉塞感を脱却する唯一の道かもしれません。そのためには財政負担につながる過度な政策に期待するより規制緩和・構造改革によるイノベーションが生まれる環境づくりこそ、まさに求められる施策だと考えます。

社会の変化が加速していることを実感している現在、我々企業人自らがイノベーションの本質を正しく理解し、「変われる企業」になるために健全な企業家を發揮することを、恩師の言葉を思い返しながら、新年にあたり強く決意した次第であります。